

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	近世ドイツ魔女裁判関係史料二題（一）
Author(s)	若曾根，健治
Citation	熊本法学，45：67-82
Issue date	1985-10-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/2603
Right	

熊本大学法学会発行

熊本法学 第四十五号（一九八五年十月）抜刷

近世ドイツ魔女裁判関係史料二題（一）

若曾根 健 治

近世ドイツ魔女裁判関係史料二題（一）

若曾根 健治

一

イタリアを除きヨーロッパで魔女迫害の規模が漸く拡大し始めるのは十六世紀末葉である。法皇インノケンティウス八世が一四八四年十二月五日に回勅いわゆる「魔女教書」を布告し、聖ドミニコ修道会士で宗教裁判官ヤコブ・シュブレンガーとハインリッヒ・インステイトリスが『魔女に与える鉄鎚』を著わしケルン大学神学部発行の一四八七年五月十九日附認可書を添えて出版したときから算えて恰度一世紀を経ている。魔女迫害はとりわけて激しかったドイツにあつては、三十年戦争の最中一六三〇年頃に頂点に達する。パーダーボルンのイエズス派

学院で道徳神学を教えていたフリードリッヒ・フォン・シニペーが、魔女裁判と対決した良心の書『犯罪にたいする警告あるいは魔女裁判に関する法的疑問』を匿名で発表したのはまさにこの頃すなわち一六三一年のことであつた。⁽¹⁾

本稿で「近世ドイツ魔女裁判関係史料二題」と題して紹介するものは、右記魔女迫害最盛期ドイツの魔女裁判に関係している。その一つは、魔女の疑いで逮捕拘禁されていたネルトリンゲンの一市民が釈放される際に誓ったウァフエーデ（復讐断念）の文書（一五九四年十月十一日）、⁽²⁾ もう一つは、魔女として断罪され一六〇〇年七月二九日ミンヒエンで刑死した放浪者家族とその仲間の顛末を記した刷り物である。⁽³⁾

特にこの両篇を取り上げるゆえには、筆者がネルトリンゲンおよびミュンヘンの市博物館でそれらから直接受けた強い印象によるところが大きい。しかし他方で、魔女裁判手続が二つの主要な柱としていた告発と自白の両手続は右記二史料の中にもよく現われていると同時に、これら両篇にまた、魔女裁判に拘わった近世司直権力あるいは国家権力の態様を知ることができ、寄与するところがあろうと思われるのである。

- (一) 以上二篇については次の文献参照: Jacob Sprenger = Heinrich Institoris, *Der Hexenhammer* (Malleus maleficarum), aus dem Lateinischen übertragen und eingeleitet von J. W. R. Schmidt (Deutscher Taschenbuch Verlag, 3. Aufl., 1983) (なお本館蔵三版『近代の世語—新モリス、後1—111—111頁参照)。この書はp. XXXII—p. XLIの「イン・マント・マントハ世の「魔女教書」(Tenor Bullae Apostolicae adversus haereticum maleficarum) 別名「魔女要望書」(Summis desiderantes) のマント語文をマント語の翻訳文が収録されている。Friedrich von Spee, *Cautio Criminalis* oder Rechtliches Bedenken wegen der Hexenprozess, aus dem Lateinischen übertragen und eingeleitet von Jonhann Friedrich Ritter (Deutscher Taschenbuch Verlag, 2. Aufl., 1983) 魔女裁判研究文獻には長大なものがあろうが、この二篇は、その中で二篇のLandwörterbuch des deutschen Aberglaubens, III, Berlin u. Leipzig 1930/31, Sp. 1853—58 収録の Weiser-Aall の記事 (Hexe) をマントリッヒの Friedrich Merzbacher の Hexenprozess, Witchcraft, 2版による一連の記

事を参照 (Lexikon für Theologie und Kirche, 5, 1960, Sp. 316—19; New Catholic Encyclopedia, 14(1967), Washington, p. 97—79; Landwörterbuch zur deutschen Rechtsgeschichte, 9, 1972, Sp. 145—48) など右ヘルマン・マンローはマント語のマント語を後後期魔女裁判例を次のように列挙して、p. 18° Würzburg (1749), Endingen am Kaiserstuhl (1751), Kempen (1775), Glarus (1782), Tosen (1801) の臨時 (1793)。

- (c) Gloria Eschbauer, *Beschneidliche Tortur* Der ehrbare Rat der Stadt Nördlingen im Hexenprozess 1593/94 gegen die Kronenwirtin MARIA HOLL, Nördlingen 1983, p. 50—52.
(e) Sigrid Mecken (Hrsg.), *Die letzte Reise*, Sterben, Tod und Trauersitten in Oberbayern, München 1984, S. 175.
Vgl. Michael Kunze, *Der Prozess Pappenheimer*, Ebdelsbach 1981, S. 291—293.

二

一 一五九四年十月十一日にネルトリンゲンの市牢から釈放された一市民とはウルム市生れ当時四五歳の女で、その名をマリヤ・ホルと言った。そこで、彼女が市参事会にたいして行ったウアフニエデの文書を紹介するに先立ち、ここに至った経緯を以下で概略述べておくことは便宜であろう。

プロテスタントの帝国都市ネルトリンゲンにおける大規模な魔女迫害は、一五八九年から一五九四年にかけて起こり、この比較的短期間に集中した。(この期間に、市長・市参事会員・

市書記・市会計官など都市高官の未亡人あるいは妻を含む三四名の女と一人の男が魔女として断罪され火刑に処せられたと言う。因みにこれより少し後の一六〇〇年当時ネルトリンゲンは人口八七九〇を算えた。この間の事情は、狂暴な魔女迫害者ヨハネス・ブフエリンガー（当時家具師。後に工芸家となる。一五八四年市参事会員に選ばれた。）が、一五八九年十一月一日に市長職の一つを襲って以後、一五九四年七、八月にもなおその職にあったことに負うところが大きい。（ネルトリンゲンでは、市長職は三つあつて毎年四ヶ月交代でひとり当番となつた。）ところで、ネルトリンゲンの元文書館館員であつたグスタフ・ウルツ博士——彼が戦前發表した魔女裁判研究はネルトリンゲン史の分野では今日なお定評がある——は、右記期間中に起きた魔女裁判のうち四例を詳細に紹介しているが、これらのうち歴史小説の対象ともなり人口に膾炙しているもの一つは、市会計官の妻で魔女とされ一五九〇年九月九日に処刑されたレベッカ・レンプの事例である。とりわけ三人の娘と三人の息子とが連名で獄中の母に宛てた手紙やレベッカ自身が夫に書き送つた書簡などについては、日本語でも接することができる。⁽²⁾

このレベッカの夫ベーター・レンプの官舎は、典型的な円形都市ネルトリンゲンの中心部マルクトプラッツ（ここに市庁舎と聖ゲオルク教会とが立つ）から南西の方向へおよそ二〇〇メートル行つたワインマルクトにあつた。すなわちここに市の大きな市場倉庫があつたが、これは本来葡萄酒、塩、穀物の置場と

して一五四一年から四三年にかけて建造され、一五四九年以後それが市会計官の役所となつた。（その結果「会計所」（*Rechnungshaus*）とも呼ばれた。）この役宅にレベッカ・レンプは家族と共に住んでいて、そしてここから一五九〇年六月一日夫の出張中に拘引された。ところでワインマルクトを挟んで会計所の向い側に当時「クローネ」と言う名の旅館が立ち繁昌していた。ネルトリンゲン魔女裁判史で今日広くその名を知られているもう一つの事例の中心人物マリア・ホルは、この旅館の主人ミヒャエル・ホルの妻であつたのである。⁽³⁾

（一）ネルトリンゲンの魔女裁判をめぐる研究として以下を参照。

- Johann Friedrich Weng, Die Hexen-Prozesse der ehemaligen Reichsstadt Nördlingen in den Jahren 1590—1594, Das Ries, wie es war, und wie es ist. Eine historisch-statistische Zeitschrift, 6. Heft (1841), p. 5—60, 7. Heft (1841), p. 3—11; B. Emil König, Ausguckten des Menschenwahn im Spiegel der Hexenprozesse und Autodafés, Berlin-Schöneberg, a. J. S. 260—65; Gustav Walz, Nördlinger Hexenprozesse, Jahrbuch des Rieser Heimatvereins e. V., Bd. 20 (1937), S. 42—72, 1d. 21 (1938/39), S. 95—120; Friedrich Merzbacher, Die Hexenprozesse in Franken, 2. Aufl., München 1970, S. 61 (Anm. 129); G. Eschbauer, a. a. O., S. 9—20. 本稿の叙述は多くはこれらに負う。

（二）森島恒雄『魔女狩り』（一九七〇）一五六頁以下、K・P・シ

ウィット著『川端豊彦・坂井洲二訳『魔女と魔女裁判』(一九六八)一五九頁以下。なお歴史小説としては Hermann Lamp, Der Sohn der Hexe Rebecca, München 1980 が知られている。

(3) 歴史小説(2) Lore Spohr-Krampel, Die Hexe von Nördlingen, Das Schicksal der Maria Höl, Nördlingen 1911 がある。またこの本から脚本が作られて、マリア・ホルの事件は一九五四、一九七八年の両度にネルトリンゲンの舞台上で上演された。

二 マリア・ホルはウルム時代は助産婦であったと言う。一五八六年五月二〇日三七歳で結婚、ネルトリンゲンで旅館「クローネ」を買収した夫と共に同市へ移住、同年五月三〇日市民権を取得した。しかし早くも一五九〇年の三月と七月とにそれぞれマリア・マルプ(同年五月十五日魔女として刑死)とアレンナ・ゼンク(同年九月九日既述レベッカ・レンプらと共に刑死)とによって魔女として告発された。ただこのときは逮捕を免れた。三年後の一五九三年になると更にイエルク・キュルシュナウアー、バルバラ・キュルシュナウアー(この夫婦は同年五月十七日刑死)、ウルスラ・クライン、アンナ・ファウル、ニルビニアナ・ニッカー、アンナ・アウフシニラーガー(以上四名同年十一月十四日刑死)からも告発を受けた。これら告発者の告発はすべて彼ら自身拘引拘禁され尋問を受ける中で強要されたものであった。こうして遂に一五九三年十一月一日マリア・ホルにたいして魔女の容疑で逮捕命令が出、彼女は他の容

疑者ドロテア・グンデルフィンガー(前市長の未亡人)およびマルグレータ・シュターヘル(この兩名は同年十一月十四日刑死)と共に、市牢「クレステル」(Klöstle)(旧跣足修道士会修道院)に収容された。翌日すなわち十一月二日に右記ハネス・ブフニンガーがヨハン・ボツシュから市長職務を引き継いだ(一五九四年三月一日まで)。

マリア・ホルにたいする第一回尋問(尋問は札間手続の下では取調すなわち捜査と公判の両手続を含んでいた)は一五九三年十一月五日にあった。⁽⁴⁾彼女は牢から引き出され尋問室で尋問官と向き合った。このときの主任尋問官はセバステアン・レティンガーおよびヴォルフガング・グラーフの両博士。彼らはすでにレベッカ・レンプの裁判にも関係していた。当時市参事会法律顧問官の地位にあった。陪席尋問官は四名の市参事会員(メルヒオル・ヴェルシュ、ゲオルク・ニクラス、バオル・レリン、ハンス・ヴィルヘルム・グンデルフィンガー)であった。主任および陪席尋問官はすべて市参事会から派遣された札間官(Kreisherrn)であり、以後の尋問日にもほぼ出席した(特にグラーフ博士とグンデルフィンガー市参事会員は常に陪席)。この日の尋問で被告マリアは告発者によってかけられた魔女の嫌疑をきっぱりとはねつけた。彼女は再び獄吏に伴なわれ牢に連れ戻された。

第二回尋問日は三日後の十一月八日。主任尋問官はグラーフ博士ひとり。陪席尋問官には第一回のときの四人と共に更に四

名の市参事会員（ガンゴルフ・バイシュラーク、ハンス・パオル、ペーター・マインガー、それにカスパー・ヘルリン）が加わった。この日マリアは告発者のうち右記ウルストラ・クライン（靴革工の妻）、アンナ・ファウル（ワインマルクトにあった麵屋の未亡人）と対面させられた。彼女らは告発内容を繰り返した。（ウルストラ）「マリアを二、三年前酒場で見かけた」（アンナ）「ワインマルクトの魔女舞踏会でマリアが踊っているのを見た。そこに（マリアにたいする前記告発者の一人）イエルク・キェルシュナウアーも居た」。これらの証言をマリアは断固否認した。ウルストラ・クラインは更に供述を行なった。「マリアは思い違いをしている。彼女は言い逃れようとしているが、そんなことはできるはずもない」。アンナにたいしてはマリアは次のように主張し容疑を否定した。「彼女は嘘をついている。本当のことを述べていない。神は正義に味方する」。この日も尋問官には成果は得られなかった。

（4）以下マリア・ホルの裁判に関する叙述は、G. Eschbauer, a. a. O., S. 27—56 によつて編集された裁判の一件記録による。

三 第三回尋問（十一月九日）でも被告は前言を翻えなかった。ここで新しく刑吏（maister）が呼ばれた。彼は入室したが、このときは被告に姿を見せたのみで具体的に拷問具を用いた拷問は行なわなかった。しかし刑吏が現われたことはそれだけでも被告にたいして相当の威嚇（Terror）となつたで

あろう。

自白をさせるために実際に拷問が加えられたのは第四回尋問のとき（十一月二十一日）で、この間十二日間中休みがあった。尋問官は、拷問を行なう用意のあることを予め知らせておいた被告にこの期間中に（前記ウルストラとアンナはこの間に処刑された。告発の撤回を防ぐためである。）考え直させようとしたわけである。しかしこのときも被告は無実を訴えた。直ちに刑吏が呼ばれた。マリアは身体を縛られた後「親指締め」の拷問を受けた。しかし彼女は「神よ無実の人間を憐れみ給え」と述べたのみだった。このため続いてスベイン長靴を用いた「足締め」が課された。そして次の第五回から第十回に至る尋問日にマリアはほぼ連日拷問された。すなわち十一月二日から二八日にかけてである（十一月二五日は尋問休止）。以後も四回実施され、最後の拷問は尋問調書によると第十五回尋問日（一九四二年二月二〇日）に行なわれた。拷問の種類は右記に加えて更に「紐吊るし」および「張り台伸ばし」があった。⁽⁵⁾

こうして、前述一九三三年十一月五日の第一回尋問から翌年八月二九日の第十七回尋問に至る間（ただし、右記第十五回尋問のあった一九四四年二月二〇日以後第十六回尋問日の八月二二日まで恰度六箇月審理は停止）、十一回の尋問日にマリアは拷問に晒された。（全部で「親指締め」二回、「足締め」二六回、「紐吊るし」十九回、「張り台伸ばし」十五回合計の拷問数六二回とも言われている。司直はこれを「穏当な拷問」(bescheidener)

料 denliche tortur)と呼んでいた。^(5a)

しかしマリア・ホルはこれに耐えた。市参事会派遣糾問官たちは有罪の心証を形成するだけの自白を彼女から得ることができなかった。魔女裁判史上めったに見られない例だった。^(5b)

(5) これら拷問内容の一斑は阿部謹也『刑吏の社会史』(一九七八)一五二頁以下参照。

(5a) Actum Mitwochs den 28. Nouembri anno etc. 93 Maria Höllin soll verner durch die einungert angesprochen vnd da es vnn nölten mit bescheidenlicher tortur angriffen werden. (Eschbauer, a. a. O., S. 53.)

(5b) Sigmund von Riezler, Geschichte der Hexenprozesse in Bayern, 1896, S. 150 (Anm. 1).

四 一五九四年八月二十九日の第十七回尋問(結果的にこれが最後の尋問となった。)を終えても未だ自白が得られない。魔女迫害者側はマリア・ホルの裁判を今後どのように取り扱かえばよいか改めて考えざるを得なくなったものようである。と言うのは、ネルトリンゲン市参事会記録簿に書き込まれた一五九四年九月九日の条には次のような記述が見られるからである。

「如何なる条件でマリア・ホルを釈放すべきかの問題について(市参事会から)命令が下され、法律家たちは文書でもって自己の見解を示し、これを市参事会まで提出すべきこととなった⁽⁶⁾。ここには当然釈放そのものは是非も論議の対象となつて

いたであらう。このような命令が出された背景のひとつには九月一日にかの魔女迫害者ヨハネス・フフリンガーと交代して当番市長となったゲオルク・オスタータークの影響が与かっていたと言う。(彼はすでに一五九四年三月一日から七月一日まで市長職にあったが、この間マリア・ホルの裁判が停止されていたことは既述の通り。)

市参事会のこの決定に基づき、三人の法律家が鑑定書を作る役目を引き受けた。主任尋問官のW・グラーフ博士とS・レッティンガー博士、それにもうひとり、ネルトリンゲン市が前から雇い入れていたアウクスブルク市参事会附法律顧問ゲオルク・トラーデル博士である。(このトラーデルは、マリア・ホルが度重なる拷問によっても自白をしなかったことはそれ自体彼女の無実を証明するものに他ならないとの趣旨の手紙(日附不詳)を残している。)右三博士が鑑定書の作成作業に従事していた間の九月十八日にマリアの実家元、ウルム市在住の親族セルファティウス・エービンガー、アルブレヒト・シャード、ハインリッヒ・シルボツホは被告人の釈放を願ひ出た請願書をネルトリンゲン市参事会に送付していた(九月二十八日も同趣旨の請願書を再度発行。)

さて、市参事会に提出された三鑑定書の内容であるが、ここでは要点だけを摘記すれば、九月二二日の日附を持つグラーフの鑑定書は最も峻厳な調子で書かれており、裁判を続行、さもなくばウァフューデを誓約させたりえて自宅に監禁すべきとす

る。レットインガーおよびトラードルのものは、ウァフェーデを文書でもって誓わせることで釈放するのが妥当としている。ただ釈放の理由づけは両者で多少異なり、このうちトラードル博士の見解は右記に紹介した彼の手紙におけるものとはほぼ同じだが、レットインガー博士は次のように主張する。すなわち、被告は決して無罪と言うのではなくて、ただ現在手許に在るかぎりの証拠をもってはこれ以上更に被告を拘禁し裁判を続けることが不可能であるにすぎない。

右の如き鑑定書を受理して市参事会は思慮の結果いよいよマリア・ホルを釈放する臆を固め、このため先ず九月二十六日および三〇日の両日に夫ミヒャエル・ホルを呼びつけ、その席で被告を釈放後自家に迎え入れる用意があることを確めたうえで、次いで十月十日には同じくミヒャエルに妻の獄中食事代金として二〇〇グルデンを市参事会にたいし支払うべく承諾させたのである。

以上些か長くなったが、マリア・ホルがウァフェーデを誓約するに至った経緯の概略である。以下で本稿の主題に移らねばならない。

(e) Actum Montags den 9. Septemb. anno etc. 94 Was gestalt Maria Möllin zu erlassen, ist beuehl geben, dz die rechtseleten ihr bedenkchen schriftlich begreifen, vnd einem e. rath übergeben sollen. (G. Eschbamer, a. a. O., S. 55)

五 釈放の日すなわち一五九四年十月十一日被告マリア・ホルは尋問室で、ネルトリンゲンの帝國都市裁判長官（別名帝國シュルトハイス）でネルトリンゲン市民キリアン・ライヒェルトを含むその他市参事会から特に派遣された市高官の面前にあって、市書記からウァフェーデの文書を読み聞かせられた。（マリアはおそらくこの日以前にすでに釈放とウァフェーデ誓約のことは市参事会から告げられ、これを承諾していたに違いない。）この文書は、主任尋問官兩名のいずれか、たぶんセバステイアン・レットインガー博士によって起草された。その全文は次の通りである。⁽⁷⁾

「わたしネルトリンゲンの市民マリア・ホルはこの文書によって次の通り告白しあらゆる人びとに知らせる。およそ三年前にわたしにたいしある噂が生じ、それは、わたしが非キリスト者の忌まわしい魔女犯罪にとり憑かれ、またこれに大抵伴って起こる付属の犯罪に関係していたとするものであり、以後時が経つにつれて次第に広がりわたしとわたしに属する人々と覆った。しかしわたしは魔女犯罪に関与していたと言うのはただ単に噂に止まらず、同じ罪ですでに拘引されていた他の人びと〔による告発〕を通して明らかであった。すなわちこれらの人は信用のできる十分な証拠と状況証拠とからかくの如き犯罪の疑いある者として終始わたしの名をあげ、しかも〔刑場あるいは獄中で〕息を引き取る最後までこれを主張し続け、かくて

遂にわたしを主の最後の大審判日における神の審判の前へ引き立てて憚らなかつた。

右述の「告発のあった」点を篤と考え念を入れて見定めた結果神聖帝国の都市ネルトリンゲンの厳格で慎重なる、賢明で誉れ高き市長および市参事会かつわが恵み深き支配者たちは、司直の名において職権でもってわたしを牢に拘禁し適宜必要に依り幾度も繰り返し取り調べることに踏み切った。かくして彼らはあるときは穏便なあるときは峻厳な態度でもって臨みわたしを尋問聴取した。のみならずかくの如き取調は、わたしと同様に獄中にあり後に判決によって処刑された幾人かの「魔女犯罪の」容疑者（これらの「わたしを告発した」人たちは不断はわたしを欺いたり、わたしにたいし嫉妬心・復讐心を起こしあるいは他の不穏当な感情・嫌厭心を抱いたりしたことは全くなかった。）にたいしても行なわれた。市参事会から尋問を託された札問官と取調の必要に即してそのときときに配属された他の官憲とは、これら「告発者」の一人ひとりや個別にわたしと対面させ、その結果に関して更に「わたしに」尋問を加えた。これらすべてを行なうのに彼ら尋問官は特別な熱意を示し、必要があるときはわたしに注意を促し警告を発し詰問をして取調にあたったが、この後で、わたしが落ち着いて慎重熟慮できるようにと、このための十分な時間を許した。

かくの如き尋問においてとりわけて明白が求められた。わたしはこれを思慮深くまた強要されず自発的に行なったが、その

直後に途方もない嘘を並べたて（「これによって先になした自分を打ち消してしまつた」た。しかるにこのようなことがあったにも拘わらず尋問官は寛大にもわたしが真実告白するのを長い時間かけて辛抱強く待ち、これ以上わたしに明白を無理しいしたりわたしから不愉快なことを強要したりはせずに、ただただわたしがもっと慎重熟慮するようにと望んだのである。以上と並んで、彼らはわたしの靈魂の救済が危ぶまれており救いが必要であることも忘れずにいたため、⁽²⁾その必要あるときは」手続が完全に停止され以後「暫く」わたしにたいし実施されなくなつた。その後「再開された取調で」わたしは「尋問官が問いを發するときは」毎度、單なる否定や逃げ口上風の否認に大概終始して憚るところがなかつた。これに反し、わたし自身の行動、性向、行状、素行、その他諸態度の示すところから見ても紛れもなく「わたしの犯罪であることを」名指しており、あらゆる情況から言つて十分信頼に値する有力で明白な証拠と推測とにたいしては、わたしの手で少しも反論が提出されず弁明も否認もなされなかつた。更にわたしが申し立てた無罪の主張は証明されておらず、また自己の嫌疑を晴らしこれを別の人間に転嫁すると言う、裁判において無罪を主張するのに必要とされている点についても、何ら明らかにするところがなかつたのである。

それゆえに先述の誉れ高き市参事会には、前々から行なってきたわたしがたいする手続を一層真剣に固守し実施すべき理由

も権限も十分あったのであり、これは今なお存する。けれども、その広く知れ渡り父のような特別の慈悲心と寛裕なる態度とから市参事会は、わたし自身の哀願、嘆息、懇願に免じ、またわたしの愛する夫・ヒュエル・ホルそしてわたしたち両名の最近親親族による慎み深く熱心な請願かつ他の多くのれっきとした人たちが幾度となく申し出た執り成しおよび彼らが差し出した嘆願書に基づき、今回左の条件でそして「拘禁中」わたしの食事に要した費えを「わたしが市参事会に」返済することと引き換えに、わたしを拘禁牢から解き放ち現在進行中の手続を免除し、これをもって釈放の願い出を聞き届けることに同意した。

まず第一にわたしは、この拘禁と拘禁中何かの方法でわたしにたいし加えられ行なわれたことについて、前記名譽ある市参事会、更にわたしの逮捕に拘わった官憲でして「尋問官・獄吏・刑吏・告発者など」誰であれ当訴訟の全過程に用いられた人びとにたいして、陰險にも復讐し誹謗し報復を企てたりは決してしない。わたし自身であれ他の人であれあるいは事情を知った如何なる人であれ、そのようなことが行なわれるのを人に許可しない。次に第二にわたしは拘禁から釈放された後即刻帰宅し自家に留まらねばならず、昼夜を問わず他の事に託けてそこを離れたり、市参事会から特別の赦しや同意を得ず外出してはならない。さらに「第三に」わたしは復讐を断念する趣旨の当文書によって口頭で神と聖福音書とにかけ誓った宣誓に基づき、右に「第一と第二で」述べたところを常に守り破らず誠

実素直に履行することを約束すると同時に、屢々名をあげた市参事会が父の如き態度で示した恩寵、寛容、慈悲にたいし更にもっと謙虚に感謝の念を表わし、今後市参事会から慈悲深いあらゆる保護と庇護とを待ち望む。わたし自身あるいは他の人間がわたしの名でこれらすべてに何かの方法で背反し、また貴賤の別なく様様の地位にある人びとを通して獲得しあるいは「他人を介せず」自ずから取得した聖俗の權利並びに権限、恩寵、自由が右述に違背するときは、わたしはこれら權利並びに権限、恩寵、自由を諦め、これに加え「一時的であれ永久的にであれ二度とは魔女の疑いで裁判に服せしめられないと言う」赦免、免除、軽減、原状回復をも思い切る。そして人間理性が事あるごとに案出しあるいは繰りうる他の一切の敵愾心をばわたしは放棄する。

右述すべてに何らかの方法であるいはいずれかの事項につき背馳するときは、わたしは人を欺き並ならぬ奸智に長け危険を及ぼす人間として、わたしの身柄すなわち肉体と生命にたいしてはあたかも宣誓違反を犯し不実で悪評高き犯罪者にたいする如く、裁判を経てあるいは裁判を経ずにまた市参事会の望み通りに取り扱われ、かくて正規の終局判決もなくまた毫も赦免の余地なく、更に一切の異議、口実、例外を認められず、手続に服せしめられ現実に執行されても止むを得ない。このことすべてを真実にそして不断に証明するため「冒頭に名をあげたわたし・マリヤ・ホルは熱心に……」。

印章押捺簡所。〔一五〕九四年十月十一日⁽⁸⁾。

これがマリアが読み聞かせられたウァフニード文書の内容であった。この読み聞かせの段階の本文書は、市参事会法律顧問官が市参事会の命に従がい、実際に誓約する本人に代わり本人を主語にして作成した私案 (die in originali verfertigte verphat) の域を出ず、未だ公式の文書ではなかった。そこでマリアは臨席していたネルトリンゲン帝国都市裁判長官 (des heiligen Reichs Sattmann) に彼の印章を文書末尾に押捺してくれるように頼まねばならなかった。その結果右記「印章押捺簡所」に彼の印章が張り付けられ、これによって私案文書は公認されることになったわけである。次いでマリア・ホルは、おそらく改めて全文を自ら読み下すと言う形でもってウァフニードを誓約した。そして彼女が帝国都市裁判長官キリアン・ライヒェルトにたいし彼の印章を請求した当の行為は、右ウァフニード文書本文末尾に見られる「冒頭に名をあげたわたしマリア・ホルは熱心に……」のところへ後に文章化されることになる。すなわち、この追加部分を含め右記文書全文はたぶん市書記によって書き改められた。現在ネルトリンゲン市博物館に展示されているのはこれと思われ、右私案文書の数箇所が削除され、また別に二箇所新たな文言が附加されて全文六一行である。⁽⁹⁾のうち最後八行分は紙片裏側に書かれ、そしてこの部分が表側へ折り曲げられている。⁽⁶⁾なお、削除されたまた附加された部分は

私案文書における本来の趣旨を少しも損なう性格のものではなかった。⁽⁷⁾

ウァフニードを誓約しマリア・ホルは釈放された。一五九三年十一月一日に逮捕されてほぼ一年を経っていた。この釈放について市参事会は短文の釈放命令なるものを発行しており、この趣は市書記の手でネルトリンゲンの『ウァフニード記録簿』(Urtendbuch) (現在ネルトリンゲン市文書館所蔵) 第六六葉右下段に書き込まれた(日附の行も加え全五行)⁽¹⁰⁾。この釈放命令の写しがマリア釈放の日市庁舎において待機していた夫ミヒャエル・ホルに釈放の証拠文書として手渡された。(これにたいしウァフニード文書の写しは夫婦いづれにも交付されなかった。)

(7) 以下本紹介では、必要な場合には、テキストの個々の文言や文法にさほど拘泥せず、ウァフニード文書全体の趣旨を生かすよう心掛けて日本語に移した。「」内は筆者が適宜補ったもの。なおこのテキストは、J. F. Wenz, a. a. O., 7. Heft, p. 20—21 にも収録されている。

(8) ICH MARIA HÖLLIN, burgerin zue Nördlingen, bekennne hiemit, vnd thue kund allenweniglich, nachdem vor vund von vns/ſühr 3. jahren hero, ein ruff vnd leumeth, wider mich entstanden, das ich mit dem abscheylichen vnd vncristlichen hezerayaster, sampt was demselben gemainlich volgt vnd anhengig ist, verhafft vnd zugehan, dz selbig auch nit allain je lenger je

mehr erwachten vnd mir vnd den meiningen selbst
fürkommen, sondern durch andere gleichen vnhayls
halber, eingezogene personen, solches mit gemessenen
wolgelauben anzuigungen vnd vmbständen, besten-
dighch viß mich angeben, vnd dermaßen beharret, dz sy
biß in iren letzten atmen vnd mit vnerschrocknem
entlichem betreffen für den aller berechtigten richter
stuel Gottes am jüngsten vnd großen tag daß herrn
solches steuff behertzig vnd behaupt, also dz die
ernueste, fürsichtige, ersame vnd weyse, herrn burger-
maister vnd rath diser daß hey, reichs stadt Nördlingen,
meine gn. gepickende herrn, von ampts vnd obrigkeit
wegen, höchlich verunsacht, mich in derselben verhaft
einzuziehen, vnd gegen mir rechtlicher gebürt vnd eray-
selnder notturfft nach, zusuoffahren, vnd zu vilen
vnderschidlichen mahlen. So wol in der stüte, allß mit
der ernstlichen schärffte, mich nit allain zubefragen,
vnd zu examiniren, sondern auch etliche in gleicher
verhaft beschuldigte, vnd hernach mit vriel in gleich
peinlich hingerichte personen (welche sonst meiner
person ainliches falsches, meys, nachhyrigkeit, oder
vnder dachlich affectis vnnnd widerwillens ganz
vnuerdächlich.) Jede abgesunder nit vnder augen für-
stellen, darüber auch weitere erkundigung einziehen vnd
pflügen, auch dazselb alles durch die verpflichte herrn
rathsainiger. vnd andere jederweylen zugeordnete für-
neme personen, mit sondern vleiß, vnd vermittlest

notwendiger erinnerung, ernahnung vnd verwahrung,
mir fürhalten, darzu gerume zeit, zu genußsamem
nachdencken zugelassen. Vnd bey disem allem mir für-
nemlich mein selbst wolbedächlich freylich vnd
vngewungen bekennen, vnd gleich darauf vnglaubwür-
dig vernainen, zugemeißel gefüret worden, vnd aber
dieses alles darzu vnangesehen, mit mir ein guete lange
zeit, gnedige dedult gehabt, in mich verner nit gesetzt,
oder ichtes widerwertiges mir zugemuettet, sondern
ainig allain zu beßern nachdencken, vnd darneben
meiner seelen hayls gefahr vnd not darbey nit zuerger-
ben, der proceß allerdings eingestelt, dennoch bey mir
gar wenig vnd mehr nit gewürckt, dan dz ich mich
jederzeit des bloßen widersprechens, vnd aufrichtigen
vernaymens, in gemain angemaß, hinwider aber, die
wider auch, meiner selbst person thun, wessens, handels,
wandels, vnd dergleichen verhaltens beschaffenheit nach,
außdruckenlich benambsle, vnd mit allen vmbständen
wolgelaubte, notringende vnd handgreifliche anzaigun-
gen vnd vermuetung, von mir im wenigsten nit wider-
legt, verantwortet oder abgehint, vilweniger mein
fürgedene vnschuld, vnd die in recht dazu erforderete
entschüttung vnd aufführung dargethan, daruonwegen
dan wolernannter ein e. rath mehr dan kennegsame vnd
wolbeloegte vrsachen gehabt vnd noch hefft, den gegen
mir hincor fürgenommen proceß, mit noch mehrern
ernst zubeharren vnd zusuohnstrecken, Jedoch auß hau-

ter sonderer väterlicher milte vnd barmherzigkeit, vnd zugleich vff mein selbst diemütigst flehen, seuffzen vnd bitten, dann auch meines lieben ehewürts Michael Hollen vnd vnser beeder nächstverwandter freundi, vnderthenig vnd vleißige fürbiten, auch mehr anderer anstehlicher herrn vñmahlen gethone intercession vnd fürschriften, mich solcher meiner verhaltung, vnd dell müßlaufenden proceß, vff dñßmal vnd mit erstattung der vff mich gewanter azung nachholgender gestalt zuerlassen bewilliget, vnd sich erbiten laßen, das ich nänlich vnd zuuordest dise fangkhus, vnd was an mir in ainichen weg begangen vñnd fürgenommen, gegen wolgedachtem einem e. rath, noch jemand derselben zugehonen, vnd wer bey diser ganzen handlung jemals gebraucht worden, in vnguetem nimmermehr, im wenigsten nit andern, ayßern oder rechen solle noch wölle, weder durch mich selbst, noch durch andere, oder jemand wissenschaftlich gestatten, solches gelhon werden. Vnd dan fürnämlich vorner dz ich vor vnd nach erlaßung der frohnvest, mich stragk in mein heutliches wohnung verfüegen, darinnen mich persönlich enthalten, vnd weder zu tag noch zu nacht vnd wider ainichen gesuchten schein drauß nit weichen, oder begyben, ohne weiterer eines e. raths begnedigung vnd bewilligung, demnoch geredt vnd verspriche ich bey meinem ayd, weichen ich in disen vñnphads brief leiblich zu gott, vnd vff sein hayliges euangelium geschworen hab, solches alles stet,

vnd vuerberlich zuhalten, demselben getreue vnd gehorsamlich zugehen vnd nachzukommen, wie ich mich dan gegen off wolermelte einem e. rath, diser so väterlich erzäigter gnade, milte vnd barmherzigkeit, vñnmer diemütigst thue bedanken auch in künfftig alles gnedigen schutz vnd schirms getristen vnd dan dz durch mich oder ander von meinewegen, disem allein, in ainichen weg, solle was zuwider fürgenommen oder gehandelt werden, verzeihe vnd begibe mich auch, aller gaistlicher vnd weltlicher bericht vnd recht, gnaden vnd freyhalten, welche disem zuwider durch hoch oder niedern standts erlangt, oder aigner b=wegnus ertailt vnd gegeben, dazu aller absolution, dispensation, relaxation, restitution in integrum, vnd alles andern widerwertig, wie das manschen vernunft immer erdencken oder gebrauchen kunde oder möchte, da ich auch solchem allem, wie obermelt, inn ainichen weg oder puncten, endgegen handeln wurde, solle gegen meiner person, an leib vnd leben, mit oder ohne recht, nach eines e. raths willen vnd gefallen, allß gegen einer treiflosen, maynzygigen vnd bekannten vbelthäterin, welche ohne dz mit ordentlicher endurteil, noch nit vollkommenlich absoluit ohne alle einrede, betheiff vnd außzuge procedirt, vnd mit wñrklicher execution verfahren werden, betrenlich, sonder anglist vnd geschwede, deßen alles zu wahr vnd bestendiger vrkunde (hab ich anfangsgemehte Maria Hollin mit theiß--)

Sigill stat am 11. Octobris anno etc 91

(9) ネルトリンゲン市博物館に展示されているこの文書を写真撮影したものが、G. Eschbaurer, a.a.O., S. 61 に掲げられている。

(10) Auf geiste geschworne vrphed ist von einem e. rath des heiligen reichs stat Nordlingen Maria Höllin von Vm wurtlin zur Cronen althe ihrer hat erlediget, vnd ferners orientgaltten zu irem heufflichen wesen gelassen worden, dessen sie hitmit auch fried vnd sicherheit haben soll. Decretum in senatu de dato 112. Octob. an. 91.

(Eschbaurer, a. a. O., S. 49)

(11) Actum den 11. Octobris anno etc. 91. MARIA HÖLLIN wurtlin zur Cron, ist an heut der verhafft entladen auf maß vmd gestallt, wie in dem raths protocoll den 11. Octobris anno etc. 91 vmd dan auß irer geschriben vrphed, welche an irem ort zufinden, mit mehrern zuvernehmen, Actum vt supra. (Eschbaurer, a.a. O., S. 56.)

(33)

六 以上ウァフエーデ文書の紹介でもって一応本稿の大きな課題の一つが果たされたわけだが、以下では、この文書に示されたウァフエーデの内容の特色とそこに現われたネルトリンゲン司直権力の態様とに關して、少し付言しておくのが望ましい。マリア・ホルはこのウァフエーデ文書によって、市参事会および実際に取調にあたった市参事会派遣糾問官その他逮捕・拘禁・審理に拘わった者たちにたいして、拘引・裁判で被った損害・危害について釈放後復讐を行わないことを誓った。被逮

捕者が（判決宣告以前に）釈放されるときしばしばウァフエーデを誓約したことは中世以来特に十四世紀以降の諸都市において広く知られる。リューベックの娘都市ロストックにおけるウァフエーデ制度につき貴重なモノグラフを著わしたヴィルヘルム・エーベルは、このように被逮捕者の釈放を契機に誓約されたウァフエーデを「ハフトウァフエーデ」(Hafturleide)と呼んでいる。⁽¹²⁾「ハフトウァフエーデ」が近世においてもなお知られたことは、右記エーベル自身ロストックについて明らかにしており、⁽¹³⁾また魔女の疑いで拘引された者も（取調・公判の段階で）釈放されるときウァフエーデを約束した例のあることは、フリードリッヒ・メルツバッハーが特に十七世紀バンベルク司教領の『官房記録簿』に記録されたウァフエーデについて指摘するところである。⁽¹⁴⁾

ところで右記バンベルクの『官房記録簿』に知られるウァフエーデによれば、被釈放者は神と聖徒との前で、バンベルク司教領内から生涯立ち退くことを誓約している。これもやはり中世以来のウァフエーデ法のひとつだが、これにたいし、マリア・ホルの場合彼女は釈放後自家に留まることが許されたが外出を禁止された。一種の「自宅拘留」(Hausarrest)である。これが、マリアのウァフエーデにおける特色と言えるのである。このような「自宅拘留」の多くは疑いもなく被釈放者に取調・審理の内容、とりわけて拷問に關する事柄を他言させぬための処置を意味していた。これとの関連で一点指摘しておくならば、

市参事会記録簿一五九四年十月十一日の条の末尾には、マリア・ホルの獄吏あるいは刑吏が彼女の裁判に関して牢で見聞したことを体験したことを決して「口外せず秘密にする」よう命じられた旨書き込まれているが、これも同趣旨のものである。

市参事会のこのような処置の中にネルトリンゲン司直権力（市長・市参事会）の一態様が現われているように思われるのである。この態様が如何なる性格のものであったかは、当該ウァフニーデについて従来指摘されてきたところには、ほ示されている。すなわち、ネルトリンゲン魔女裁判研究の開拓者ヨハン・フリードリッヒ・ヴェンク師は一八四一年の論稿でマリア・ホルのウァフニーデ文書を「（マリアでなく）市参事会——あるいは市参事会法律顧問官と言った方がよいかもしれないぬが——自身の名誉を（拷問に耐え抜く彼女にたいしなおも続けられている裁判の有り方に疑問の眼を向ける）世間から護ろうとした」記録と評し、またネルトリンゲン魔女裁判研究の權威グスタフ・ウルツ博士によると、当ウァフニーデ文書は市参事会が披瀝した「牽強附会のおぞの極致を示す傑作」であり、市参事会は自ら作成したこの文書でもって、マリアの裁判にあたつて何ら不法を犯しはしなかったし何らの疾しいところもなかったこと、逆にこの世における最も慈悲深き司直であつたことをマリアおよび他に信じ込ませようとしたと言ふ。

マリア・ホルのウァフニーデおよびその文書をめぐるとこのような評価は、該文書を通読する者にとって概ね理解できるとこ

ろであらう。すなわちネルトリンゲン市参事会はこの文書でもって次の如く主張した。マリア・ホルの逮捕は正当であつたと、逮捕の契機となつた告発者の告発はマリアにたいし何か含むところがあつてなされたものではないこと（従つて真実を述べたものであること）、尋問に際し告白を求めたがこれを強要はしなかつたこと、尋問官は被告の有罪を立証できる十分の証拠を持つていたのに反し、被告は否認を繰り返すのみでこれを全く反証できなかったこと、従つて司直は確實に被告にたいし裁判を続行し有罪判決を下しうる立場にあつたにも拘わらず寛裕と慈悲心から被告を釈放したこと、である。見られるように、市参事会はマリアにたいする裁判権行使（逮捕・拘禁と取調・審理）の正当性・合法性根拠を連綿と述べ立て弁明にこれ努めたのであつた。

右市参事会の主張するところがもし真実であるならば、市参事会はマリア・ホルを釈放後も外出を認めず自宅に引き籠もらせ、裁判内容の口外を禁ずる処置は必要ではなく、また獄吏・刑吏にも箝口令を布くことはなかつたであらう。実際は被告にたいし何度も拷問を加え告白を強要していたことは、ニッシュバオマー女史によつて編纂されたマリア・ホルにたいする尋問調査より明白である。そしてまさにこの峻厳なる拷問にも拘わらず被告から尋問官を満足させるだけの自由の得られなかつたことが、疑いもなく被告釈放の決定的理由であつた。これは主任尋問官セバステアン・レッティンガーの市参事会向け既述

鑑定書の明らかに示すところである。(これにたいしマリア・ホルに向けられたウァフエーデ文書では市参事会はウルム在住親族によるマリア釈放の請願書のことを強調しているが、しかしこの釈放請願が釈放への決定的理由ではなかったことは、既述のように、請願書が現われる以前にすでに被告の釈放問題が市参事会内部で論議の対象となっていたことからして明瞭である。)

一年かけた裁判の揚句が結局証拠不十分で被告を断罪できず釈放せざるを得なかったことが、まさしく市参事会にとっては一大痛恨事だったことは推測するに難くない。しかるに市参事会が釈放の本当の理由は決して表に現わさず、寛裕と慈悲心を装った。(と言うのは釈放の真実の理由を公表することは、市参事会にとって、マリア・ホル逮捕のきっかけとなった告発者の告発が正しくなかったおそれのあること(しかもなお悪いことにこれら告発者をすでに処刑してしまっていた)、そしてこの間違っていたかもしれない告発に基づいてマリアの裁判が延延行なわれたと言ふことを容認せざるを得ない羽目に陥ることになる。)このような隠蔽こそがマリア・ホルのウァフエーデ文書を通して知られるネルトリンゲン司直権力の一側様を示していたと言える。

- (2) Wilhelm Ebel, Die Rostocker Urfehden Untersuchungen zur Geschichte des Deutschen Strafrechts, 1938, S. 52ff.
ニーベルはこの著書で、ウァフエーデの三形態を指摘している。

(γ) Streitfehde (ρ) Gefangenschaftsfehde (ι) Haft-
urfehde の三つである。このうち(γ)はウァフエーデの古い伝統的な形態で、敵対する当事者におけるフエーデとその和解の際に起きた。すなわち和解契約(Sühnevertrag)の一種である。

(こ)では(ρ)・(ι)とは異なって、相手側を捕提すると言うことは未だ問題となっていない。(こ)は、フエーデの経過中に相手側を捕提できる好機があった場合にこれを捕提した後で、その釈放の際に起きた。これにたいし、(ι)で前提となっている捕提は、(ρ)のように事実上の力関係の結果であつたのでなく、都市裁判権の行使つまり法的な問題として生じたのである。このように一方当事者の捕提を契機に起こった(ρ)・(ι)は、十四世紀以降ウァフエーデの基本形態をなしたが、実際のウァフエーデ文書のうへではしばしば厳密に区別できない場合がある。いずれにせよ、ニーベルが(ρ)・(ι)を概念上区別した意図は、ウァフエーデ法の発展、すなわちウァフエーデが古いフエーデ法の対象となっていた時期から新らしく都市刑事司法の一分野となる時期への移行を明らかにしようとしたところにある。

- (13) 彼はロストック文書館所蔵の一三二四年から一六三〇年にかけて発行された九〇七のウァフエーデ文書を時期別(ほぼ二五年毎)に分類したが、その結果は、次の通りであった。1324~1350 (6), 1351~1375 (8), 1376~1400 (21), 1401~1425 (22), 1426~1450 (64), 1451~1475 (72), 1476~1500 (142), 1501~1525 (102), 1526~1550 (139), 1551~1575 (149), 1576~1600 (73), 1601~1630 (109). (Ebel, a.a.O., S. 27f.)

- (14) F. Merzbacher, a.a.O., S. 162 (Anm. 295).
(15) Actum Freytags den 11. Octob. anno etc. 94. Entlichen solle dem marther von thais wegen ernstlich eingebun.

den werden. Wz er an disem ort durch auß gesehen, ge-
hört vnd erfahren, nit von sich kommen zu lassen,
sondern zuverschweigen. (Eschbauer, a.a.O., S. 56.)

(16) J. F. Weng, a.a.O., 7. Heft, S. 25.

(17) G. Wulz, a.a.O., Bd. 21, S. 113.

(18) マリア・ホルの面白い自白と言へば第十七回尋問（一五九三年十一月二四日）におけるものがある。二匹の猫が厨房で卵を盗んだので蚊よけ粉薬を盛ったが死んだかどうかは知らない、さらにこの蚊よけ粉薬を混ぜた葡萄酒を飲ませひとりの少年を殺害したと。しかしマリアは後者についてはその場で直ちにこれを撤回してしまったのである。

七 最後にウァフエーデを誓約、釈放後のマリア・ホルについて摘記。一五九五年二月十九日市参事会はマリアに教会を訪れるときのみ外出を認め、七箇月後の九月十九日になってようやくこれを全面的に許した。一六〇八年夫ミヒアエル・ホル死去。（同年かつての主任尋問官シンガーおよびグラーフ相次いで死亡。ブフェリンガー前市長はすでに四年前に死す。）翌年マリアは鉄商人ゲオルク・ゼンクと再婚、その三年後夫死去。一六一三年五月二一日旅館「クローネ」を親族のひとりに売却。一六二七年七八歳で三度目の結婚を果たす。（一六三〇年十一月二八日、マリア・ホル裁判に関わった最後の生き証人、もと市参事会派遣糾問官で既述のヨハン・ヴィルヘルム・グンデルフィンガーが没する。）一六三四年十月二日マリア死す。時に八五歳。子供はなかった。夫ミヒアエル・ハン同年十月二〇日死

去。時あたかも三十年戦争を彩ったネルトリンゲン会戦の起こった日（一六三四年九月六日）の僅かに後のことであった。これ以後自由都市ネルトリンゲンは経済的に急速に没落して行く。しかしマリア・ホルが釈放された年の翌年すなわち一五九五年は未だそうではなかった。この年の一月、旅館「クローネ」に一夜の宿をとったひとりの男がいた。バイエルン大公で後のカソリック諸侯同盟主および選帝侯、マクシミリアン一世である。この男こそ、ドイツ諸侯中最も精力的な魔女迫害者と言われ、そして次に紹介する一六〇〇年首都ミュンヒェンを舞台とした大魔女裁判劇の大立者だったのである。

（未完）